# ［チョコラン小説］

風錆龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
［チョコラン小説］

【Ｎコード】
Ｎ０４５２ＢＡ

【作者名】
風錆龍

【あらすじ】
チョコットランドを舞台し、色々な登場人物が入り乱れ、グダグダな感じに紡いでいくほのぼのとした殺伐ストーリー（意味不）、とくと御覧あれ。

※別サイトにて同じ様な物を投稿しております。

## プロローグ（前書き）

※この小説は約1年程前の設定での内容となります。
そのため、投稿日時点でのチョコットランドと差異が御座います。
ご了承ください。

# プロローグ

チョコットランドにはかつて神の治める光の城が存在したと言われていた・・・

神・・・光の城の王は、魔界からの征服者からいくたびも地上の平和を守っていました。

しかし、数千年前の古き時代、レイコールの悪魔と呼ばれた古の魔王との

戦いを最後に光の城は歴史の表舞台から姿を消した・・・

闇は払われ、また光も失われた・・・

これはチョコットランドの伝説・・・

光の城の存在を示す文献も殆ど残っておらず、

多くの人々はその過去の戦いの存在すら忘れてしまっている・・・

しかし、私たちが暮らすこの時代に至って、

もう一度、人々の前に失われた光がまた姿を現そうとしていた・・・

光の城は強く気高い冒険者の来訪を待ち望んでいる・・・

貴方は・・・光の城の求める冒険者となりえるのか・・

# プロローグ（後書き）

～後書き＆注意事項～

この小説の設定は基本的にゲーム内に沿った物にしようと思いますが。
チョコットランドは何気にストーリーわかりにくい感じなので、一部作者の独自の設定を織り交ぜる予定です。ご了承下さい。

プロローグについて。
大神官アガスティアの台詞から勝手に作成。

# 第一話

薄暗い通路をこそこそと進む影が一つ・・・

「いつまでも草原なんかでビビリと戦ってられるかよ、

一気にクリムゾンデモンとやらを狩って有名になってやる・・・」

???

隠れている者は、黒髪を乱雑に伸ばしている少年である・・・

装備は新米冒険者用のライトメイルと、これまた新米用のバタフライナイフ、ブリキプレートである。

少年がいる場所は、死の塔レイコールと呼ばれる塔の2階層目の入り口である。

その少年は周りをうろうろしている、メソメソおばけやヤミコウモリを上手くやり過ごしつつ

1階層を突破して、第二階層までやってきたのだ・・・

もちろん、その新米装備で固めている見た目通り、普通なら草原でビビリスライムと

戯れているレベルの冒険者である。

案内嬢は「今はまだ草原で強くなったほうが良いわね♪」と言っていたが、

その少年は無視をして、★４のマップに来ていた・・・

一階層目で余裕で敵をかわして二階層目へ来たため調子に乗っていた・・・

少年　　「ん～・・・ん？なんだこの鎧？古臭いな・・・あんま良い物じゃねぇーな」

少年は二階層目の入り口から進んで少ししした十字路で鎧が飾られているのを見つけた。

西洋で使われていた全身を完全に覆うタイプの鎧である・・・大きさは相当大きく、

少年よりも縦幅が高かった・・・持っているのは大きな槍と大きな盾だが、

相当時間が経っているようで、ボロボロである・・・

少年　　「はぁ・・・こりゃだめだぁ、つかえねぇー」

少年は軽く鎧を調べて、使えそうに無いのがわかるとその鎧に背を向けて

十字路をどちらに進むか考え始めた・・・

・・・ガチャリ・・・ギチギチ・・・

背後で金属製の何かが擦れる音が聞こえた・・・

少年　「ん・・・？ぁ・・・」

背後を振り返る・・・すると、先ほどまで単なる飾り物の鎧だと思っていた物が

大槍を振り上げて今にもこちらを串刺しにしようとしているではないか・・・

少年　「うわぁぁぁぁぁ！！？」

咄嗟にブリキプレートを構える・・・今更だがオブジェクトに擬態するモンスターの存在を思い出した、

だが、そんなちっぽけな盾で防げる訳がない・・・

少年　（やっぱ忠告きいとけばよかった・・・）

と、遅すぎる反省をしていると・・・

横から何かが割り込んできた・・・

シュタタタタタ・・・バコッバコッバコッ・・・ガシャーンッ・・・

その影は高速でその亡霊騎士に攻撃を叩き込んで倒してしまった・・・

女性　「鎧破片集め？そのレベルでは必要ないでしょう？」

一瞬だが、状況が理解できなかった・・・

その女性の装備は、和天女チヅル、バタフライピン、ＧＤクロー、
堕天使、シルフシールドと、
先ほどの戦闘の方法からしても速攻戦士だと言うのはわかった・・・
速攻戦士　「何所か怪我でもしてる？大丈夫そうだと思ったんだけれど」
その女性は倒した亡霊騎士の亡骸を適当に漁って何かを手にとるとこちらに突き出してきた・・・
速攻戦士　「鎧破片が欲しいならどうぞ、ここは危ないから街に戻ったほうが良いわよ」
突き出してきたアイテムは、青銅鎧の破片と言うアイテムだ、
ライトメイルを強化してポーンメイルにするのに必要なアイテムだ。
少年　「ぁー・・・えっと、ありがと・・・ぇ？」
と、その速攻戦士に行き成り腕を掴まれた・・・
速攻戦士　「君はホタル君？」
ホタル　「ぇ？何で俺の名前を・・・？」
速攻戦士　「プリムさんから依頼、いきがって塔に足を踏み入れた新米を連れ戻して来いって」

ホタル　　「・・・ぇ？」

ばれていないつもりだったが、どうやらばれていたようだ・・・

つばちゃ　　「私はつばちゃ、とりあえず戻るわよ」

と、強引に腕を引っ張られて街に戻る事になった・・・

プリムさん怖いんだよな・・・何されるんだろ・・・と恐怖で引き攣った顔のホタルは

速攻戦士の特性を思い出した・・・

ホタル　　（確か・・・速攻戦士は速度を速めるために防御力を捨ててるんだよな・・・

俺でも勝てる・・・かな？）

が、すぐに諦めた、装備からしても相当強い、勝てるわけは無いのだ・・・

ホタル　　「いやだぁぁぁー、はなしてぇぇぇ」

ズルズルズルーともと来た道を引きずられる切ないホタルの叫びが塔の内部に木霊した・・・

## 第二話

街の中央にて新米冒険者の少年が縛り上げられてプリムに注意をされている。

その様子を見ながらリカバリンMを飲んでいるのはつばちゃである。

プリム　「だから言ったでしょう？貴方は草原でおとなしくビビリスライムと戯れてなさいって・・・」

プリムはニコニコ笑顔で注意している。

目が笑っていないので、多分相当怒っている・・・

ホタル　「でも、いつまでた・・・なんでもないですごめんなさい」

言い訳をしようとした所、瞬間で睨まれてしまい、つい謝ってしまう・・・

プリム　「わかってるならはい、このクエストをクリアしてきてね」

プリムは紙を少年の顔にべたっと貼り付けると、

他の冒険者にニコニコ笑顔で挨拶しはじめた・・・

ホタル　「縄・・・ほどいてくださ・・・」

一応言ってみたが、プリムは華麗にスルーと言うより気が付いていない・・・

つばちゃ　「ほどく？」

何時の間にかつばちゃが覗き込んでいた・・・

ホタル　「おねがいしま・・・ちょっ！」

つばちゃは何を思ったのかおもむろに漢ドスを取り出した・・・

ホタル　「ごめんなさい、ほんと切腹とかかんべ――ッ！？」

咄嗟に謝罪してみたが、つばちゃはその漢ドスを振り上げた・・・

ホタル　「うわぁぁぁぁぁ！！？？」

つばちゃ　「怒ってる？」

雑貨屋の前でつばちゃはこちらをちらちらと見ながらきいてくる・・・

ホタル　「行き成りですよ？あんな風にドスを使うなんて・・・怒ってはないですけど」

あの時、つばちゃは縄をほどこうと思ったが、手でほどくのが面倒そうだったので、

ちょうどバックに入っていたドスを使って縄を切断したのである・・・

ホタル　「あんな風に行き成りドスなんて持ち出されたら斬られるかと思いますよ」

つばちゃ　「・・・・・・」

なんだかんだでつばちゃは落ち込んでいるようだ・・・

???　「つばちゃ、何やってるの?」

と、雑貨屋の方から声をかけられた・・・

声のした方を向くと真っ赤な装備で身を固めた戦士らしき女性が現れた・・・

つばちゃ　「りゅちゃ・・・」

つばちゃは少し困ったような顔をした後、ぎこちない笑顔をりゅちゃに向けた。

りゅちゃ　「そっちの新米君は何?彼氏?」

りゅちゃと呼ばれた女性はRガイアと言う竜の装備の上位版を装備している・・・

つばちゃ　「プリムさんからの依頼・・・」

つばちゃはクエストの記載された紙を取り出してりゅちゃに見せた。

りゅちゃ　「・・・えっと？調子に乗った新米が塔に挑戦したから連れ戻して来いと？
報酬はリカバリンＭ２０個？まぁ、あなたなら楽なクエストね
んで、そっちの新米君が調子に乗った新米ね・・・なるほど」

その女性はクエストの内容を確認して、こちらをじろじろと見てきた・・・

ホタル　「あの・・・新米君じゃなくてホタルって名前がちゃんとあるんですが・・・」

一応、自己紹介をしてみた・・・

りゅちゃ　「ん？新米君に名前って必要かな？」

一瞬で切り捨てられてしまった・・・

りゅちゃ　「ところで新米君、君の手に持っているのはクエストじゃないかね？
どれどれ、お姉さんに見せてみなさい」

ホタルの持っていた先ほどプリムに渡された（顔に貼られた）クエスト用紙を取り

内容を確認しはじめた・・・

ホタル　「あっ・・・返して下さいよ」

りゅちゃ　「・・・ぇ？何このクエスト・・・あなた相当プリムに嫌われたわね・・・」

りゅちゃはホタルから取り上げたクエストを確認すると、哀れむ目でこちらを見てきた・・・

ホタル　「なんだっていいじゃないですか」

とりあえず、クエスト用紙を取り返して、内容を確認してみた・・・

---

［ウィステラの街］　［依頼者］

・罰クエスト　街の案内嬢プリム

［依頼内容］

・調子に乗って案内嬢のアドバイスを無視した新米君に
　チョコットランドの厳しさを教えるためのクエストです。

［条件］　［報酬］

・ビビリスライム　１００匹　・そんなもんあるわけないでしょう？

・レットゼリー　５０匹　　自業自得だから、頑張ってね♪
・トゲネズミ　２０匹
・角カエル　１５匹　　注）終るまでは街に入れません。

---

ホタル　「・・・・・・いや、これはないだろう」

とりあえず、目をしっかりこすってからもう一度クエスト用紙を確認した・・・

もちろん、見間違いなはずもなく・・・

ホタル　「もう駄目だ・・・」

ガックリと膝をついて絶望していると、二人から声をかけられた・・・

りゅちゃ　「あぁ～・・・まぁ、仕方ないよね」

つばちゃ　「自業自得・・・リカバリン美味しくない」

りゅちゃは呆れた用に手を振って去っていく・・・

つばちゃはリカバリンMを飲みながら横でこちらを見ている・・・

つばちゃ　　「手伝う？」

その一言は心に染みた・・・ホタルは本当に泣きそうになりつつクエストをこなすために

立ち上がり、門へと向かった・・・つばちゃはなんだかんだで後ろで見守っていて、

危ない時に助けてくれたりもした・・・

## 第二話（後書き）

～後書き～

実際のゲームではこんなクエスト存在しません。
もちろん、作者の脳内のみのクエストです。
登場人物をどう登場させようと思いつつ、
主人公（ホタル）の成長を描いていきたいと思う。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0452ba/

---

［チョコラン小説］

2011年12月31日23時52分発行